



2月15日宇川での交流会。右は報告する青森平和委員会小田桐さん

経ヶ岬米軍基地が発足し、Xバンドレーダーが本格稼働して420日を過ぎようとしている状況の下、2月15日、16日、「米軍基地いらない京都府民の会」は、Xバンドレーダーが配備されている青森県平和委員会の小田桐さんを迎え「丹後連絡会」「米軍基地建設を憂う宇川有志の会」など現地のみなさんと交流会（13名参加）を開催しました。

## 経ヶ岬米軍レーダー基地・現地交流会 (2月15日～16日)を開催



左写真・上: Xバンドレーダーが入っている建屋。冷却装置の騒音がひどかったが防音措置がされ改善された。発電機の騒音は軽減されたものの近くでは相変わらず大きい。手前の金網には、現在高圧電流が流されている。囲み内は遠方から見たXバンドレーダー。中: 米軍基地正面入り口からの写真。コンクリートブロックの左側を進むと基地本体の「保護区域」で、ゲートがある。真正面のドームは、「高高度電磁パルス遮蔽された衛星通信アンテナ」で、衛星通信に使われる。ハワイの基地に情報データを流し世界的なミサイル防衛のシステムがコントロールされる。下: 網野町島津にあるシエネガ社（警備）の住居。68人分の入居ができ、昨年12月末に入居。

1日目は経ヶ岬米軍レーダー基地を視察し、レーダーテナントやアンテナドーム、6つある発電機の騒音や軍関係者の「Yナンバー」の乗用車の多さなど見ながら、米軍側のフェンスが倒れかかる「平和菜園」も見てまわりました。その後宿泊する施設に移動し学習交流をおこないました。

府民の会の共同代表である岡田京都平和委員会会長の挨拶の後、片岡事務局長から経ヶ岬の米軍レーダー基地の経過や状況、韓国に配備が予定されているTHAADミサイル（終末高度防衛ミサイル）とのかかわりなど、日米両政府が経ヶ岬の米軍レーダー基地を重視していることをたくさんの写真を使って紹介しました。

続いて小田桐さんより県内40ヶ所にもわたる陸海空の自衛隊基地や演習場、さらに民間供用になっている米軍三沢基地、そしてミサイル防衛の最前線としての車力のXバンドレーダー基地等、まさに軍事に依存する青森県の実情が報告されました。そして広大な車力の基地と比べ非常にコンパクトな経ヶ岬の基地には「特別な役割」があるのではないかと指摘されました。（2面へ続く）

発行：米軍専用レーダー基地の設置の撤回を求める京都府民の会（略称）米軍基地いらない京都府民の会  
 連絡先：京都市中京区壬生念町30-2 ラポール京都5階  
 京都総評内 京都憲法センター 気付  
 ☎075-801-2308 fax075-812-4149  
 過去のニュースは、URL: <http://www.labor.or.jp/sohyo/xband-home.html> で見ることができます。

つづいて「米軍基地建設を憂う宇川有志の会」の永井さんが現地の報告をしました。昨年12月25日網野町で発生した米軍属(レイセオン社の社員)と地元青年との衝突事故について、米軍属の信号無視が明らかであるにもかかわらず、米軍属が「信号は青だった」と主張したことから、事故から1ヶ月以上たった現在も事故の確定がされていませ



ん。永井さんが怒りをこめて語ったのは、米軍任せの不誠実かつ無責任な対応に終始している京丹後市、丹後警察、防衛局の問題でした。そして事故から1ヶ月後の1月24日、基地警備軍属(シエネガ社送迎車)による駐車場への突入逆立ちという事故が発生。恐れられていた事故が続発しました。その

他、住民の声を無視する米軍属の居住地、通勤問題等、「住民の安全安心の確保」とはほど遠い状況が続いています。4月24日には市長選、市議選がおこな

われ、「憂う会」を中心として安全安心問題を一大争点とする運動が高まりをみせています。参加したメンバーは基地撤去の運動の重要性をあらためて確認しあいました。

2日目は舞鶴基地を訪ね、停泊するイージス艦や補給艦、ヘリ空母といわれる護衛艦「ひゅうが」など基地の施設が強化されている状況も視察しました。

今年秋、三沢で開催される日本平和大会では、京都代表

団は車力にオプショナルで視察ツアーを計画しており、丹後と青森といった県境を越えたつながりがこのたたかひに必要で、今回の交流会で大きな成果を得られたと確信します。

写真・上: 平和菜園から見た米軍基地。奥の工事用の網は風で吹き飛ばされ倒れたまま。米軍基地の看板も風にとばされているが、そのまま放置されている。中: 7日撮影の看板。いつ飛ばされるかわからず危険とマスコミが報道し、一部整理されたが上の写真のようにほとんど放置されたまま。中下: 1月24日の事故。米軍の送迎車が駐車場につっこみ、そのまま道路に転落。8(憂う会提供) すぐ横は民家。下右: 舞鶴基地。イージス艦。下左: 同、改修中のひゅうが。